

# 男性のボディイメージが 対人印象評定に及ぼす影響

阿部研究室 4 年 18L1015F 佃井郁仁

## 1. 序論

外見的特徴は表情や顔のパーツだけでなく、体型を含め評価されている。佐名 (2014) は、BMI が 1 大きくなると、約 1.3 倍の確率で「だらしない (自己コントロール能力に乏しい)」と判断されることから、肥満者は自己コントロール能力に乏しいというステレオタイプがあるとした。

昨今のフィットネスブームによって老若男女問うことなく、瘦身体型を志向する考えは日本国内でますます深く浸透している。その傾向は特に若年層の女性で強く、鈴木(2014)は、女性は、自身そして他の同性が魅力的とみなしている痩せた体型を獲得しようとし、平均という後ろから迫ってくる壁に追われながら、瘦身というゴールを目指す競争を行っている可能性があるかと危惧している。本実験は体型の変化によって、どのように印象評定が変わるのかを、TIPI-J をもちいて検討することを目的とする。

## 2. 研究 1

### 2.1. 目的

男性のボディイメージ画像の変化に伴って、**Big Five** による印象評定の指標がどのように変化するのかを測定する。刺激は佐名 (2014) で用いられた **BMI Visualizer** による 3D モデルを用いた。

### 2.2. 方法

#### 参加者：

視力、矯正視力が正常な大学生 15 名 (18 歳~22 歳の男性 10 名女性 5 名) が参加した。

#### 装置及び刺激：

装置は質問紙・回答用紙、スクリーンを用いた。

刺激は **BMI Visualizer** による 3D モデルを用いた。**BMI Visualizer** は身長と体重の入力によって、一般的な体型の 3D モデルを自動表示するものである。今回男性モデルは男子大学生の平均である 173cm、女性モデルは 158cm とした。体重の値を変化させて BMI5

刻みで 15,20,25,30,35 の 5 つモデルを作成し、15,35,20,30,25 の順で提示した。刺激の提示には PowerPoint のスライドショー機能を利用した。

#### 手続き：

実験参加者に冊子を配布し、事前に 3D モデルを提示しその印象を評定する内容であると教示した。年齢、性別、参加者の自身の体型イメージの回答を求めると説明し、了承した参加者のみが、冊子に記入する方式で回答を行った。セクションは 2 つに別れ年齢性別の回答の後、BMI15 から 5 刻みで画像を提示し、自己の体型イメージに最も近いと思うものを記入した。

セクションの後半は提示された 3D モデルを、自己の性格と同様に TIPI-J で印象を回答するように求めた。刺激の提示順は、男性モデル BMI15,20,25,30,35 女性モデル BMI15,20,25,30,35 の順で計 10 モデルであった。なお、TIPI-J 内では 7 件法による回答を行い、いずれかの数字を括弧内に記入することを求めた。刺激の提示と評価の回答は 45 秒で行われ、回答後は前の体型との差を明らかにしないために、10 秒間黒いブランク画面を見たのち、つぎの 3D モデルの提示を行った。

### 2.3. 結果と考察

BMI が高いと勤勉性が低いと評価され、特に女性が評価する際の BMI30 以降で顕著であった。一方で、外向性、協調性、開放性については大きな差は生じなかった。女性が同性のモデルを評価する際には、BMI が高いと神経質性が高いと評価され、男性が同性のモデルを評価する際には、BMI 中程度のモデルが高評価、女性では評価が分かれた。

しかし、当研究はいくつかの問題点があった。刺激の提示順が全参加者で同じであったため、順番効果がある可能性がある。実験室前方のスクリーンで刺激を表示したため、参加者の席によってモデルが歪んで見えていたと考えられる。また、BMI の刻み幅の 5 が小さく、差がわからなかったとのフィードバックがあった。

## 3. 研究 2 実験

### 3.1. 実験

実験 1 をふまえ、いくつかの変更点を加え、刺激は佐名 (2014) で用いられた BMI Visualizer による 3D モデルを用いた。BMI の表示はカウンターバランスを考慮し、標準方格でどの行にもどの列にも各条件が 1 つずつになるようにしたものを、無作為に並べ替える操作を行った。評定するモデルを男性のみの 5 つとした。これを男女 10 人ずつ合計 20 名の参加者を募った。また今回は、カウンターバランスのため、10 種類のアンケートの質問順番のものをグーグルフォームで配布し、スマートフォンで回答することを求めた。また前回は、BMI の刻み

幅が小さく、変化がわからなかったという声が多数であったので、刻み幅を 7.5 とした。具体的には 10,17.5,25,32.5,40 の 5 段階とした。

### 3.2. 方法

参加者：参加者は、視力、矯正視力が正常な大学生 20 名（19 歳～23 歳の男性 10 名女性 10 名）。が参加した。

装置：グーグルフォームを用いて各参加者所有のスマートフォンで回答することを求めた。

手続き：

実験参加者は、グーグルフォームにアクセスし、スクリーン上の注意書きを了承した後、回答を行った。各条件が一つずつになるためには 10 条件が必要となる。これを男女 10 人ずつ合計 20 名の参加者を募った。

また今回は、カウンターバランスのため、10 種類のアンケートの質問順番のものをグーグルフォームで配布し、スマートフォンで回答することを求めた。また前回は、BMI の刻み幅が小さく、変化がわからなかったという声が多数であったので、刻み幅を 7.5 とした。具体的には 10,17.5,25,32.5,40 の 5 段階とした。

### 3.3. 結果と考察

BMI が高いと協調性、勤勉性が低く評定された。BMI40 では、加えて神経質傾向が高く評定される。

一方で、BMI が低いと神経症傾向が高く評定される。

なお、外向性、開放性については BMI によって大きな差は生じなかった。

参加者の性別でも、差は生じなかった。

自らを高 BMI(32.5 または 40 のモデルを選択した人)は BMI32.5 のモデルの協調性、勤勉性を低く評価しなかった。

表 1 各 BMI の Big Five の数値

	外向性	協調性	勤勉性	神経質 傾向	開放性
BMI 10	4.4	3.5	4.3	5.1	4.4
BMI 17.5	4.8	4.1	5.1	4	3.5
BMI 25	4.5	4.6	4.7	3.5	4.2
BMI 32.5	4.6	3.3	2.8	4.1	4.3
BMI 40	4.5	3.1	2.6	5	3.5

図1 中BMIと高BMIのBig Five

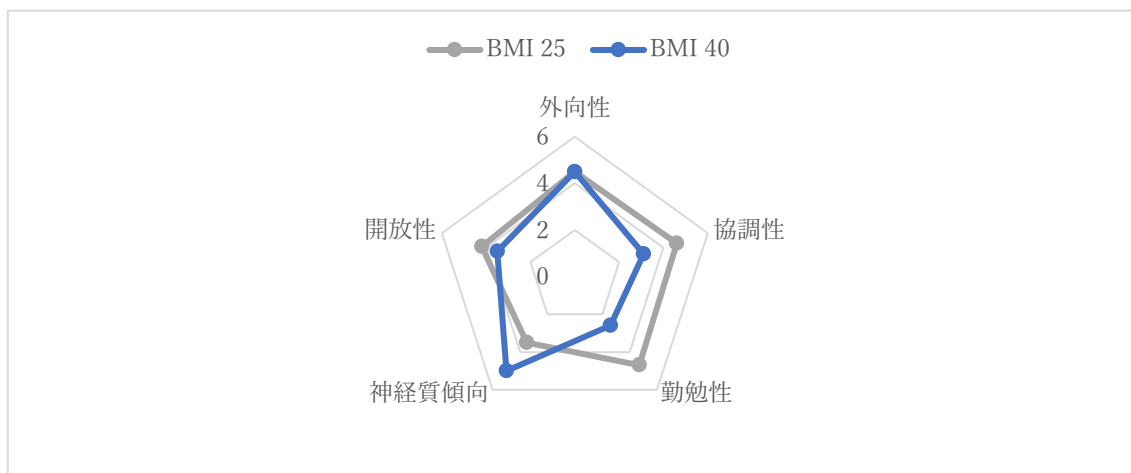


図2 中BMIと低BMIのBig Five

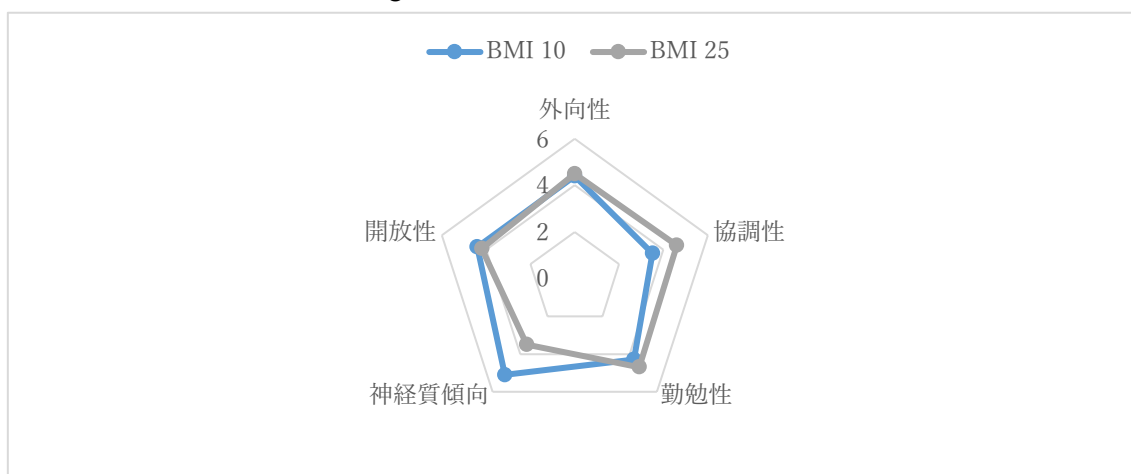


表2 BMI32.5以上をボディイメージとする参加者の各BMIのBig Fiveの数値

	外向性	協調性	勤勉性	神経質傾向	開放性
BMI 10	4	3.6	4.6	5.3	4.5
BMI 17.5	4.1	4	5.2	4	3.6
BMI 25	4.6	4.6	4.7	3	4.5
BMI 32.5	4.1	4.1	4.1	3.3	4.4
BMI 40	4.3	3.7	3.5	4.6	4

図2 BMI32.5以上をボディイメージとする参加者の中 BMI とやや高 BMI の Big Five



#### 4 総合考察

BMI32.5以上のモデルについて、勤勉性が低く評定されたという結果は、佐名ら(2014)のBMI28-29より大きなBMIでは「だらしない」と判断されるようになった結果を支持するものとなった。

人は他者の体型から勤勉性を評価することには一貫性がある。

外向性、開放性については体型によるステレオタイプはないと考えられる。

BMIが標準から離れるほど、神経症傾向が高いと評定されることから、体型が標準から離れている人は、神経症のために過食、拒食に陥っていると判断を下している可能性がある。

開放性、外向性についてはBMIの変化による数値の変化は見られなかった。この原因は、表示画像がシルエット画像であったことや、ポーズの固定化によって参加者が判断のための情報が得られなかったことが考えられる。

人は体型の変化によるボディラインの変化から性格を評定することが可能であるが、そのことからくる偏ったステレオタイプや、バイアスに注意しなければならない。